

2022年8月7日 礼拝説教要旨

詩編講解説教117「神はすべてを乗り越える」

詩編117：1～2、ローマ15：7～11

詩編第117編は詩編150編の中でも一番短い詩編です。たった2節だけのものです。それに対して再来週読みます詩編第119編は反対に詩編の中でも最も長い詩編で176節あります。このアンバランスさが詩編のユニークなところであり豊かさでもあると思います。写本によっては、第117編はあまりにも短いゆえに前の第116編の最後に組み入れてしまうもの、あるいは次の第118編の最初に組み入れるものもあります。ただ信頼できる古代訳の一つ七十人訳聖書では、やはりこの詩編を独立させておりますので、わたしたちもこれを一つの詩編として捉え読む必要があるでしょう。例えば、わたしたちが礼拝の初めと終わりに頌栄や讃栄という短い讃美歌を歌いますが、そのようなものとしてユダヤ人が礼拝の中で用いていたのではないかと考えられております。

第117編は確かに短いのですが、その内容は非常にスケールの大きいものであることに気づかされます。1節「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ」世界中の国々、世界中の人々がこの視野に入っています。「主を賛美せよ」これは命令調であって、強く賛美を促すものであります。世界はこの呼びかけに耳を傾け、これに応えていかなければならないのです。それは何よりこの世界は神さまがお造りになられたからです。造り主である神さまを讃えること、それは神さまに造られたものの本来のあるべき姿です。「主を賛美せよ」というのは何も目新しいことではなく、むしろわたしたち人間が立ち返るべき本来の姿なのです。『ジュネーヴ教会信仰問答』でも「神はわれわれの中にあがめられるためにわれわれをつくり、世に住ませられた」（問2）と告白します。神さまをあがめること、賛美すること、そこに人間の造られた目的があります。そういう意味で、この礼拝もまた創造の目的にかなった行為であると言えます。

しかしこの世界は神さまの創造の目的から大きく逸脱してしまいました。主を賛美するのではなく、被造物、この世のものに捕らわれ、支配され、それを崇めるようになってしまいました。それがあのアダムとエバの失敗からすでに始まっているのであります。人間が神さまのように賢くなろうとした。その思い上がり、傲慢という罪から人間はなかなか自由になることができません。神さまを賛美するのではなく、自分を神とする、自分の思い通りにしようとする生き方をしてしまう。それが今の世界の姿ではないでしょうか。独裁者が戦争を始め侵略し、また武力で威嚇し、核兵器をチラつかせて相手を黙らせる。世界の指導者たちはそのように自分を神としています。昨日は広島原爆の日でしたが、平和を求める祈りとは正反対の方向に世界は向かっています。国連の事務総長が昨日のスピーチで、原爆から77年、世界は何を学んできたのかと問いました。「人類はまだ実弾が込められた銃で遊んでいる」と。この混沌とした、不安に満ちた世界の原因は、主を賛美することから外れたことにあると言わなければなりません。

世界が主を賛美する理由が続く2節に記されます。「主の慈しみとまこととはとこしえに、わたしたちを超えて力強い。ハレルヤ」（2節）ここに「慈しみ」（ヘセド）と「まこと」（エメト）という言葉が出てきます。しばしばこの二つの言葉はセットで登場してることがありますが関連しています。何度かお話ししていることですが、慈しみ（ヘセド）は、人間の状態に関わらず、神さまの変わらない普遍の契約のことを意味します。まこと（エメト）も真実ということ

ですが、救いの契約に対してどこまでも真実にそれを貫かれること。それゆえに神さまが信頼に足るお方であるということです。わたしたちのどんな過去の過ちをもものともせず、その救いの契約を永遠のものとし、将来へとつなげてくださる。だからわたしたちは救われるのです。

イスラエルの民もこの神さまの慈しみとまことを経験しました。出エジプトのとき、金の子牛の事件のあとで神さまはモーセに言われます。「主は彼の前を通り過ぎて宣言された。『主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す』(出エジプト記第34章6～7節) イスラエルはエジプトから救い出されたそのすぐ後で、神さまに背き、金の子牛を作ってそれを拝むという大罪を犯しました。これは契約上は完全にアウトです。モーセはその時に十戒の石版を投げて粉々に砕きます。自分たちは神さまの戒めに生きる資格がないからです。けれども神さまはモーセのとりなしもあって、滅ぼすことを思い直され、さらには十戒を再び与えて、イスラエルを約束の地へ導き入れられます。ここに神さまの慈しみとまことがある。神さまはわたしたちを超えて救いの御業を確実に遂行されるのです。

そしてこの神さまの慈しみとまことは永遠ですから新約聖書にももちろん引き継がれます。新しい神の民であるわたしたちにも適用されるのです。今日はローマ15章7節以下を読みました。8節以下に「キリストは神の真実を表すために、割礼ある者たちに仕える者となられたのです。それは、先祖たちに対する約束を確証されるためであり、異邦人が神をその憐れみのゆえにたたえるようになるためです」とあります。そして11節にある「すべての異邦人よ、主をたたえよ。すべての民は主を賛美せよ」は今日の117編1節からの引用です。先祖たちに対する約束を確かなものとするためにキリストが救いの御業を行われました。その命をささげ、救いの契約を更新してくださった。神さまのまことを貫いてくださいました。そしてそれはすべての国々、すべての国民、異邦人に及ぶのです。今日の詩編の御言葉もまたキリストによって成就したのです。

この救いの確信さえあれば、わたしたちはどんなことがあっても乗り越えていけます。今日の短い詩編の御言葉はそのことにわたしたちを気づかせようとしています。詩編の説教が始まったのは、2020年2月、ちょうどコロナが始まった頃でした。それから二年半、この世界はまさに闇に閉ざされたような世界になってしまった。個々の生活でも多くの試練があります。でもここまで詩編を読んできて本当によかったのは、この神さまの普遍の定め、契約の確かさを改めて知ることができたことです。わたしたちが熱心だとか、しっかりしなくてとはかではありません。そういうものをすべて乗り越えて、ただ神さまが真実であられる。不信仰極まりない罪のわたしたちをもただ神さまの慈しみとまことだけが乗り越えてくださる。この一点にわたしたちの救いはかかっています。